第３２７回（２月２４日開催）

「ベトナムの発展ビジョンと人材育成からの挑戦」

ベトナム社会主義共和国在日大使館　参事官　ハー・キム・ゴック氏

質問　共産主義は宗教を好まないと通念がありますが、宗教はどう扱われていますか。

講師　ベトナム政府は宗教を信仰する人と宗教への信仰をもっていない人の双方を尊重することを方針としています。ベトナムの人口は8200万人ですが、様々な宗教を合わせると約1500万人の信者がいます。その中で最も大きなコミュニティが仏教徒のものです。これは長いベトナムの伝統に根ざしたものです。キリスト教は200年前からですが、仏教はそれよりはるか昔からベトナムにありました。

ベトナムが社会主義国であったとしても、私たちは宗教に対して友好的であり、また寛容であります。戦争中も彼らは独立と統一のためにわが国の軍隊に加わってともに苦闘しました。私は信者ではありませんが私の祖母は仏教徒です。彼女は月に2回は寺院に行ってました。家族はそれについて自由に語り合いますし、私が彼女を寺院に連れて行くこともありました。

しかし政府が宗教に対して寛容であろうとする方針を利用して、国家に抗うような活動を行う宗教の信者もいます。もし彼らが国家の法を冒すような場合には、法に基づいて裁かれます。欧米とりわけ米国からの人々の中には、そのことをもってベトナム政府が宗教を弾圧しているという人たちもいますが、もし1500万人の宗教信者が信仰の自由を手にしている現実を見ていただければ状況は理解されると思います。

質問　師を敬う態度はどこからきているのですか。**（注）質問者の会社はベトナム進出企業。**

講師　長い時間をかけて打ち立てられたベトナム人の伝統だと思います。子供の頃、両親は、「先生を尊敬しなさい」「先生を愛しなさい」と私たちに教えました。古いことわざがあります。「もし河を渡りたいなら橋が必要です。もし優れた人になりたいのなら先生が必要です」。これが世代を超えて私たちの知恵となり伝統となりました。「学ぶ」という強い伝統ゆえに私たちは先生を必要としました。

ベトナムでは「先生の日」があります。11月20日がその日です。生徒たちはその日は幸せです。勉強しなくてもすむのですから。みんなで先生の家を訪ねてそこで過ごします。政府も「先生の日」に正式な役割をあたえており、その日を祝うフェスティバルやセミナーなどが開催されます。

ベトナム人の感覚では、「先生」とはとても広い意味で受け止められます。職業的な先生－大学教授や学校の教師－にとどまらず、日本企業の仕事場において、従業員に仕事を教えるインストラクターも先生として尊敬されます。ですから先生の日（11月20日）には感謝の印として従業員からインストラクターに花や贈り物が手渡されたりします。